

ろうさい通信 【Vol.13】



診療科紹介 「皮膚科」

師走の候、地域の先生方にはますますご清栄のことと存じます。日頃より患者様のご紹介・逆紹介において大変お世話になっており、厚く御礼申し上げます。

今月は皮膚科の紹介をさせていただきます。主にアトピー性皮膚炎、蕁麻疹、乾癬などのアレルギー性・炎症性皮膚疾患の診断・治療を行っております。

当院の皮膚科は2014年10月より白藤 宜紀（しらふじ よしのり）が診療にあたっています。

（2025年より水曜日の非常勤医師外来は終了いたしました）

アトピー性皮膚炎とその治療について

アトピー性皮膚炎は接触皮膚炎（いわゆる“かぶれ”）のような単一の原因物質に対するアレルギーではなく、アトピー素因（体质）とバリア機能の脆弱性（代表例：フィラグリンの遺伝子変異や炎症に伴う発現の低下）により様々な外的刺激に対して皮膚が過敏となり湿疹を起こし、それを搔くことによって、さらに皮膚バリアが破壊され湿疹を悪くするというサイクルを繰り返し、慢性・再発性の経過をとる疾患です。

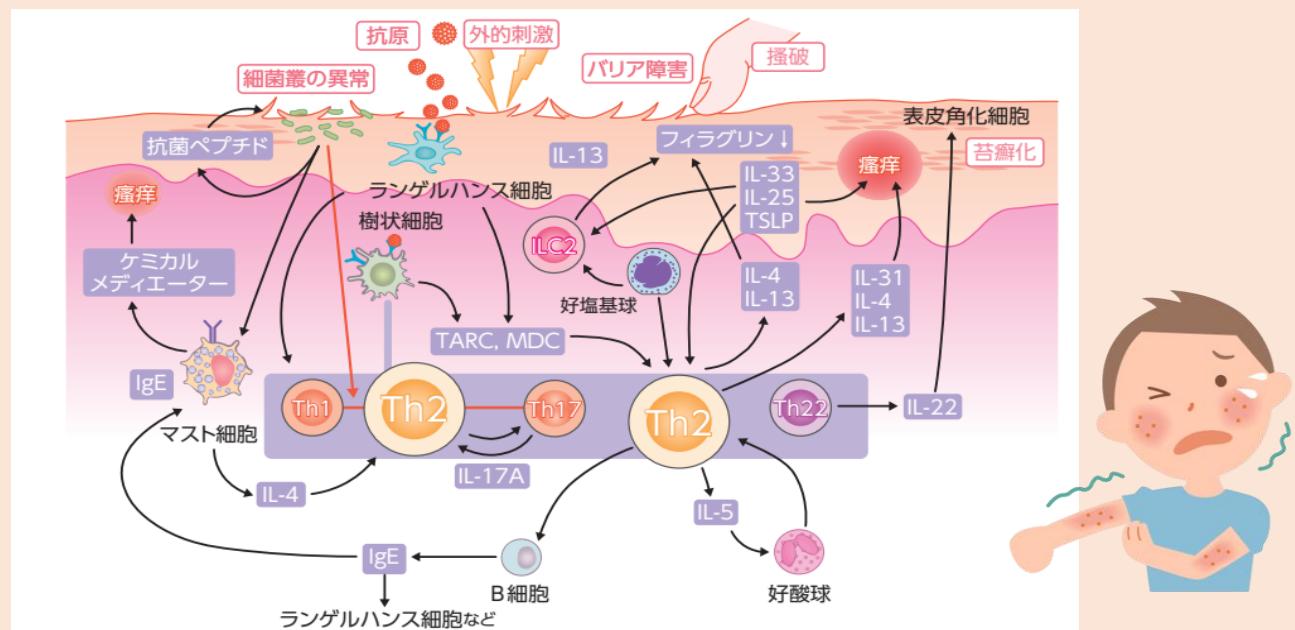
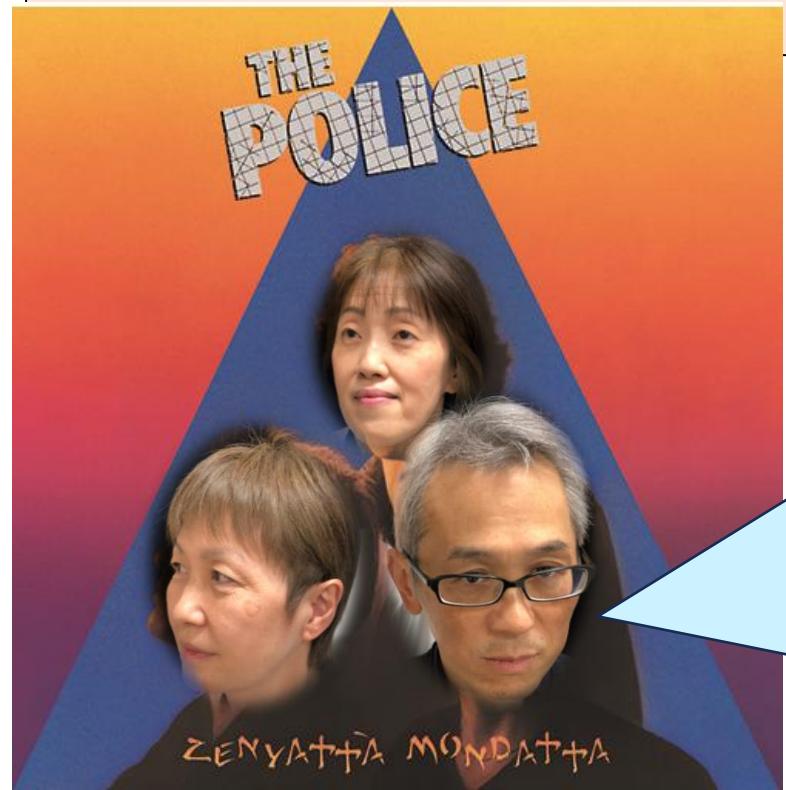


図 日本皮膚科学会 アトピー性皮膚炎診療ガイドライン 2024 より抜粋

長らく保湿剤とステロイド外用剤以外に効果的な治療選択が少ない時代が続きましたが、外用剤については1999年免疫抑制剤の一種であるタクロリムス軟膏のほか、2020年 細胞内の炎症を起こすシグナルを阻害するJAK阻害薬の外用剤であるデルゴシチニブ軟膏、2021年には免疫調整作用を有するPDE4阻害薬であるジファミラスト軟膏、さらに2025年にはタピナロフクリームというステロイド以外の有効かつ副作用も少ない外用剤が用いられるようになりました。また、重症で、外用療法のみでは十分な治療効果が得られにくい方に対し、IL-4 やIL-13というアトピー性皮膚炎の湿疹発症に対し大きく関与している物質の働きを阻害する注射薬、IL-31というかゆみの発症に関する物質の働きを阻害する注射薬、それら全体を阻害し、強力かつ速やかにアトピー性皮膚炎の症状を軽快させるJAK阻害薬の内服薬などが使用できるようになり、アトピー性皮膚炎の治療はこの10年来、長足の進歩を遂げております。当科でも、患者様の状態に応じてこれらの治療のすべてを使い分けながら行なうことが可能です。



大好きなPOLICEのCD
ジャケットをイメージし
て画像を編集しました。

何かお困りの症状があ
りましたら、ぜひご紹介
頂ければと存じます。
今後とも、引き続きよ
ろしくお願ひ申し上げま
す。

【お問い合わせ先】

住 所：〒702-8055 岡山市南区築港緑町1丁目10番25号
T E L：（代表）086-262-0131 FAX：086-263-2587
E-mail：kansapo@okayamah.johas.go.jp
担 当：岡山労災病院 地域連携室

